

宮城縣護國神社大祭奉納行事

くさ じし しき

# 草 鹿 式

奉仕・礼法弓術弓馬術小笠原流

第31世宗家 小笠原清忠 師 他 宮城菱友会



草鹿式(くさじししき)は建久5年(1194年)5月将軍源頼朝が富士の裾野で巻き狩りを催した時に、家人がしばしば鹿を射損じることがあり、古老の武士に尋ね射術の稽古の方法として草を束ねて鹿の形を作り、距離を定めて稽古をしたことが始まりといわれています。元

来は騎射の式であったものですが近世では歩射の儀式として行われています。

もっとも式とはいえ、大的式や百々手式のような厳格な礼射の式ではなく、古書にも「遊射なり」とありますように、古来より競技的な意味で行なわれていたものと思われます。競技といっても当てるだけで意味は無く、体配、式法の所作を一つでも間違えれば外れとなります。的中の矢所を問われ、間違えても外れとなります。ま

さに武士として弓矢の面目をかけて勝負します。尚、関東以北では当宮城縣護國神社のみ奉納されております。

## 小笠原流の歴史



小笠原家は初代小笠原長清に始まる清和源氏の家系です。小笠原長清は応保2年(1162年)甲州に生まれ、父は加賀美二郎遠光、母は和田義盛の娘です。最近までは甲府郊外に小笠原村がありましたが、現在は南アルプス市となっています。

小笠原姓は、高倉帝より賜ったといわれ、今日小笠原姓を名乗る家は全てこの長清に発しています。小笠原長清は26才のときに源頼朝の『糾方』(弓馬術礼法)師範となり、その後道統は長男の長経に伝えられました。長経は源実朝の師範となっています。長経には二人の男子が居りました。長男の長忠と次男の清経です。長男の長忠の子孫は、信州松本の城主となり、次男清経は伊豆の国の守護職となり

伊豆の赤沢に住むようになります。

弓馬術礼法は長男の長忠が伝承し、小笠原一族の惣領家となります。次男の清経の子孫も長忠家の人達と一緒に鎌倉幕府に仕え、いつも極めて近い間柄として両家一体となって行動をしていました。特に長忠家7代の小笠原貞宗と清経家7代の小笠原常興は、共に後醍醐天皇に仕えて、武家の定まった方式として、『修身論』と『体用論』をまとめました。これが小笠原弓馬術礼法の基本となっています。

この時から惣領家では三階菱の紋を、清経家では三階菱の中に十字を入れた紋を使うようになりました。その後も両家は密接な関係を保ちながら戦国の世を戦い抜いてきましたが、清経家の17代経直は、惣領家の長時、貞慶親子から永禄5年(1562年)11月に弓馬術礼法の道統を承継しました。

徳川時代に入ると、惣領家の人達は豊前小倉の城主、肥前唐津の城主、越前勝山の城主として明治に至りますが、経直は、徳川家康に招かれ、徳川秀忠の弓馬術礼法師範となり、御維新まで高家として幕府の弓馬術礼法の師範を務め

ています。また20代貞政は享保9年(1724年)8代将軍吉宗の命により新儀式としての流鏝馬を制定し、高田馬場で度々行なっています。

小笠原流公式ホームページより抜粋 (<http://www.ogasawara-ryu.gr.jp/>)